

おにはち
柿



がの心に心さいの彼た場。まく取
事時切に心さいの彼た場。まく取
返の親のと大ほ老夫かっえ婆力感
、そるそっなては丈な打見老はを
が。ずたふんっの大れ、に」声れ
るた案しはそ伝た「離で様すのそ
かしをと彼も手き。ら手るでそが
分がかう。てはでたかたい夫。年
は氣いよたっ女がっ車って丈る青
のななめっ言彼とか転入じ大い、
るうけ占握と、こ無自の恥、てて
いよ付をくるるもと皺りいいい
てう傷頭強いえす由こしかは向て
しまをのをて伝心るい少ば「を出
としド彼手れ手安知長まし。方み
うてイがのさをとは、ま少たの滲
とっラ安彼と女っにてたをっ下が
立かプ不が要彼や年っせと言前ち
がをのな婆必は、青言かこて以持
婆り人ん老。分下のに俯だいは氣
老怒老そた。た自のり婆をん覗顔の
ののいえ「空か老顔転に、女
さす。つている手と灰色疲の垂れたう髪に少間しか口を上げ、女どもんそすつ、揺こ青っ
が伺え。目。は虚ろでれたよ。うにゆんだふわをたえてを、かなな酔だ
彼女は。氣が。ついは。たよ。うに。ゆんだふわをたえてを、かなな酔だ
言お。う。は。が。つ。いは。たよ。うに。ゆんだふわをたえてを、かなな酔だ
合お。う。は。が。つ。いは。たよ。うに。ゆんだふわをたえてを、かなな酔だ
老婆。か。は。と。る。と。た。婆。お。茶。よ。て。と。の。を。入。試。み。な。る。こ。た。立。て。な。い。の。は。酔。だ。し。た。い。ま。た。の。普。通。に。酔。歩
した念のあた以す
青年は倒れ
青し、

たえめとれそ分いく。
っ答強何こ、大か長た。
困はをも「に。温らっ
し女気と。うあをな座
少彼語えるよや況いに
と」や答いのじ状な路
るうや」でかれのけに
なよは…んるそそ歩緒
とし年…飲す、り。一
いで青いをしよはたと
なる」は酒押だやえ婆
けでう…り後目でこ老
歩んよっはて駄っ聞な
、飲しよやい、言でう
で酒でちも聞あう中そ
のおだ「てをあそ背辛
た、ん。見の「」がも
いん飲たをう。いのに
てや酒いろ言たいたか
いちおでこがっがっい
を描ば「りと年言方走え
を。もく青てたにさ

かたた握そ彼見
とっつを。にを
何ぐ立手た皺年
ももきでった青
婆てっ端かっ
老いさ道な入
。て、来に開
たっとは出元を
っ座るにが目目
合てめ人とのに
きいつるこ女死
向つ見ぎす彼必
とをを過離。
婆尻年きをた
老に青行手いい
と路てをはて
っ、けりにつ出
やく開通年握みた
はしじ。青く滲え
年らこた、強、見
青るをいが力がも
い睨てたどうに

いり走こたい。
付くにと落白た。
がっ婆ど洒のっ
気ゆ老れの灯だ
にをがけ角光絵
と前彼。、螢の
このきたて、一枚
い目っいしは一
しのさてをに
々彼にっけ向正
々がか違付方は
瑞が確にりむれ
がけ確にりむれ
目だ、妙飾進そ
の像が微のの。
女映るはス彼だ
彼なすとマ、の
とかがのス中る
ふ静地もりのい
は、心たクりに
年えな見い通れ
青消うの早る倒
てよ分のめ

部楽倶
ト倶楽部
プリント
プ
た
あ
に
ば
そ
た
！
ズ
一
チ
、
ハ
の
ど

知心ろ
の安い
目的、だ。
目っに
。よ時の
たにくた
っ年いじ
な青て感
く、しを
たけ長と
き付成こ
泣傷ねた
かく重い
だ鋭をて
故を時っ
何彼はな
、は彼に
に片。人
急断た大
はのい
彼感て大
心得た

うは
そに
事手
大の
をそ
手の
のて
青年し
と青そ
うた
言付
う付
そが
は気
女に
彼と
「こ
寒
て

てわう
れ言こ
かうお
磨そて
く」っ
よえ握
はね間
皮いの
。かし
。た少
いたを
付あ手
がはの
気手女
もの彼
にんら
とやが
こちな
る兄し
いおも
て「で
っ。し

て家つて抱れでっかこも婆。
っ、かぎをかる言やっつ老た」
やん分すち聞れてや端っ。いよ
にゃとれ持」歸し冷、いた響し
間ちい慣気町てに、ら、しにで
のあなどた下い様にかあ出年た
つばけれし中歩るずいさ見青て
いお歩け心「で遮見なんを、っ
」「故。感。人を危やりく酔
。何たはた一れ目、ち翳重か
の。した。しりっ、そのらあにん
。た。した。心よかね、官ほば顔く
う心っ感うないに警、おの低も
ど安だは言ら近ちはは、婆は時
んしと年とな、う彼こっ老声の
ゃ少こ青。はあい」こあはのそ
ちはなとたて「なら」。「年そ…
あ年もだっく。らかあ。青…。
ば青尤んかなたわいなた」さ
お、ももなさっ終ないけよつで
「にはたら消言かてな続けるい辺
声とれかりてる立がをあ「の

いあ
てく
えら
覚ば
はし
かは
た彼
。言
。か
か
何
がな
官い
警は
に官
後警
のう
そも
は、
年は
青き
とた

い気の老の
かな分い手
温う自たの
のよで冷年
年たこ、青
青れそし、
はらてかも
婆切ししえ
老裏そ。さ
、が、たで
ず分ういり
わ自ろて通
言にだっの
も官の思こ
何警くとる
間、いるい
のはてなて
く年れうれ
ら青連そ溢
ば。へ、が
した所る光
っ出歸い

うう？と。っとはう
よよ生るがか独でよ
すし学いたな孤いの
話を大てっら、なか
ら話「しかなとえう
かと」人なば間考よ
女婆ん浪はれ時、ま
彼老う。でけのでさ
、は「い訳など中に
か年」しるしほの野
っ青い難い強す間荒
い。かかて勉余時い
」たんなしはてく
つっさかく彼持いの
くあ生な悪。、て光
いが学がをいたぎで
んれ「の気なっ過る
さ流」るてもかくま
兄の8えしでなな
お時1答対生得とた
「た「がに校しこい
い。る問高駈るて

消もてこ
はか捨る
てのをい
っる物て
巡い荷っ
がて。な
いいいく
思付な重
の気れは
ろうきの
いもりむ
ろにや進
い時にに
をのさ前
中そ暗、
のはいに
彼いなう
にるのよ
うあ光の
ふ、かっ
なもくる
んでなれ
頃

分、
自の、
、の
にも
手た
のい
彼て。
はった
女握じ
彼を感
ら手と
がのッ
な年ヤ
い青ヒ
言とは
うっは
そず腕
」。た
いたっ
寒れか
「入か
を温

いバたに大立
たし手もて
イヤがの
てジ感
しの予青
を色な
話ク嫌
しんは出強
少ピ年
う、青取
もし。を
と離れた
婆をめ円
老手始千
のたりら
こい探か
かてとト
が握わケ
年にさポ
青ずわの
さ、一と
へっ

る返年とわの
せを青だ言
返葉く礼も
ば言ら失何
えのばには
言そし当婆
とに」本老
すもが「」
返とす」よ
。とまよな
た手いいし
っの思なに
あ女はえ事
が彼とら大
信、礼もは
自き失、か
すいにやと
返て当い金
はい本「お
年つ、。、
青にやく、
後い続当
切、そ、
手女

せく目るし
さでが一度
めん婆て一
ら飲老いう
きもと歩も
あで年てう
、茶青めそ
に。し」い
年でたみよ
青れめ踏い
いこ始をい
な「き面に
ら。歩地当
取たびも本
けっ再ら、
受言とが
もくうな
でしこき
ま優いつば
つててらお
い見れふ「
を離か、ら

と
う
そ
話
少
し
か
ら
こ
れ
。こ
れ
か
ら
少
し
話
そ
う
と

